

共生社会実現にむけたJDWGの取組

1. 希望と尊厳をもって前向きに生きていく本人が増えていく活動を全国で展開

本人とパートナーが力を合わせて、ピアサポートや本人ミーティング、本人発信、社会参加を行いながら、希望と尊厳をもって前向きに生きていく本人が増えていく活動を全国各地で展開している。

- *「本人にとってのよりよい暮らしガイド(本人ガイド)」新版2026をリリース。自治体、医療機関を通じて普及。
- *希望のリレー:「認知症とともに生きる希望宣言」をさまざまな領域の人たちに届け、賛同・活動の輪を広げる。
- *自分たちの暮らす地域で、本人ミーティングやピアサポートにチャレンジ。

2. 「新しい認知症観」の実感的理解を広げる: 本人がリアルな声と姿を通じて

「新しい認知症観」が、知識の理解にとどまらずに、自分事として理解が深まるように、私たち本人の実体験を具体的に発信する活動を全国で展開。また、多世代・多分野の人と対話を重ね、共に活動する中で自然体の理解を広げている。

3. 認知症バリアフリーの推進: 厚労省・経産省・自治体の委員等として。また地域で実践的に推進

4. 自治体の「認知症施策推進計画」策定に参画、推進: 委員としての参画、計画策定を呼びかけ

■本人にとってのよりよい暮らしガイド (本人ガイド) 新版2026



本人が中心となって、本人と活動と
ともにする専門職、医師などが話し
合って作成。
本人はもちろん、これからなるかも
しれないすべての人の「備え」に！

■認知症とともに生きる希望宣言／希望のリレー

一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ

認知症とともに生きる希望宣言

- 1
自分自身にとらわれている常識の殻を破り、
前を向いて生きていきます。
- 2
自分の力を活かして、大切にしたい暮らしを続け、
社会の一員として、楽しみながらチャレンジしていきます。
- 3
私たち本人同士が、出会い、つながり、
生きる力をわき立たせ、元気に暮らしていきます。
- 4
自分の思いや希望を伝えながら、味方になってくれる人たちを、
身近なまちで見つけ、一緒に歩んでいきます。
- 5
認知症とともに生きている体験や工夫を活かし、
暮らしやすいわがまちを一緒につくっていきます。



「認知症とともに生きる希望宣言」をスタートに、
私たちは「希望のリレー」を様々な人と一緒に進め
ています。
自分も希望を持って暮らしていこうという人が一人
でも多く増えるよう、これからも力を尽くします。



わたしたちは、自分の暮らす地域で、本人ミーティングやピアサポートにチャレンジしています

鳥取



JDWGの仲間と重ねてきた本人ミーティングを、地元でも丁寧に重ね、本人からの声をもとに、本人によるピアサポートが始まった。認知症疾患医療センターが会場を提供し、市民だれもが利用できる。ピアサポートでつながった本人が、地元の本人ミーティングにも参加している。

秋田



診断後、精神科病院で部署異動はしたが看護師として継続し勤務。地域の認知症カフェ、院内での本人カフェの運営を行い、ピアサポートの場を増やしている。

北海道



診断された後、本人から動画メッセージをもらい、見続ける。自分もだれかを励ましたい、と北海道の希望大使に。

大分



診断後、落ちこむが、自分らしく暮らせるデイサービスで仲間につながり、前をむく。2019年、大分県から受託してピアサポートを開始。自宅など、本人が話しやすい場に、本人が行き、じっくり話す。ひきこもっていた本人も外に出て、戸外でのびのび相談も。同年から、大分県による研修も開催され、いまは県内で26名のピアサポーターが活躍。医師会や介護専門職との野球等の交流・関係づくりから、県内のオレンジドクター、認知症疾患医療センター等でもピアサポート活動を展開。

宮城



2015年に、おれんじドア（本人の本人による、本人のためのもの忘れの相談窓口。最初の一步を踏み出してもらう為のドア・入口を意味）を立ち上げる。2019年からは診療所内でのピアサポートも開始。そこで笑顔になった仲間たちが、運転免許など本人の暮らしにかかわるテーマについて話す集まりを常設したり、県内での講演活動など、次々と活躍へ。

高知



笑顔で前向きな認知症の先輩に出会い、希望と勇気もらう。認知症疾患医療センターでのピアサポートだけでなく、まちなかのバーなど、本人と家族のなじみの場で、本人と家族を笑顔にしている。

香川



商工会など地元で活躍中に診断されるが、2017年から受診中の認知症疾患医療センターの敷地の一角で、ピアサポートを始める。その効果に院長も目を見張り、非常勤相談員として採用。現在も勤務中。自分らしく生きる姿をみせながら、多くの本人や家族を勇気づけている。新たに相談員となる本人が続いている。

長野



退職後、元気な頃から、「新しい認知症観」を地域で学びあっていった。仲間たちと、地元の特養でボランティア活動等をしていた中で、2018年に自身が診断された。なったことを安心して仲間に話せ、同年から、なじみの集まり場の一部屋でピアサポートを開始。長年に渡る一連の活動の特養や地域密着型サービスの職員が伴走。本人の声を起点としたケアと地域づくりを実践する職員が育っている。

共生社会実現にむけた課題

1. 「基本的人権」に関する理解と日常的な実践を、具体的に推進することが必要

- * 私たち本人が安心・安定して暮らしていくために最も重要な「基本的人権」への理解と実践が立ち遅れている。
- * 基本法の理念が形骸化しないよう、人権を日常の中でどう具体的に守っていくか、実践的な理解と取組の推進が必要

2. 「新しい認知症観」の実感的理解を広げるために、見直しと本人参画での刷新が必要

- * 認知症サポーターや市民向けの講座、イベント、医療や介護・福祉・権利擁護関係者の研修等の企画や内容、テキスト、情報（チラシ、ホームページ等）が、古いままのものが多く、基本法が施行されたのに、本人の意思や力を軽視した古い認知症観が広げられ続けている。
- * 「新しい認知症観」を伝えている場合も、文言の説明で留まっていて、実感的理解を広げていないことも多い。
- * 主催者や説明する講師等が、「新しい認知症観」をピンと来ていない、他人事の場合も少なくない。
- * 普及・啓発や専門職の人材育成に関するプログラムや資材等を、本人参画で見直し、早く刷新していく必要がある。

3. 地元で暮らす本人の声や力を丁寧に活かすことが必要：自治体格差が大きい

- * 「共生社会の実現」や「新しい認知症観」の実感的理解の浸透のためには、地元の本人たちの発信や活躍が不可欠だが、「地元で暮らす本人はいない」「この地域ではまだ無理」という自治体や専門職も少なくない。
- * 地元の本人の発信や活躍を丁寧に推進・拡充している自治体もある。★それらを全国に伝え、自治体格差の解消を。

4. 本人発信・参画がカタチだけにならないように：取組の形骸化・本人のダメージを防ぐ必要

- * 自治体の取組や、企業、研究者などが、本人をカタチだけ使って、実際は本人が十分に発言できなかったり、本人抜きで進められてしまい、本人発信・参画になっていない場合も増えている。
- * 協力した本人が消耗してしまったり、協力したことで自信をなくす、失望してしまった人もいる。こうした事態がないように。

**私たちは認知症になってからもできることやりたいことがあり、地域の仲間とともに希望を持って自分らしく暮らし続けています。
共生社会実現のために、ぜひ、「本人のために」から「本人とともに」へ意識を転換し、共生社会の実現を「ともに」!**